

高校統廃合

第4回 湖北のつどい

いよいよは第3ラウンド

4回 湖北の高校を守るつどい



押谷さん



夏原さん

分を肯定的に受け止められない。長養でみんなと一緒に生活しとくむ中で、2学期が終わると自信を持ち、自分を好きになる。しかし、分教室案ではそうならない。魅力と活力と言うが、伊吹高の子たちの中で、自分を否定的に見てしまう。

湖北の会の動きは、彦根にも伝わってくる。うらやましいと思うと同時に、頑張りねばと励まされている。校長は、校内で反対運動はやめてくれと言いが、PTAが独自に活発に取り組んだ。通常、PTAは淡々と進むものだが、この活動に取り組むことで一人ひとりの方が勉強した。いま、PTA改選の時期だが、この取り組みを進めた人たちが、引き続きやる意志を示している。

湖北の運動に 励まされている

彦根の高校を守る会
夏原常明さん



杉原さん

一致点での合流は 第3ラウンドでも威力

高校統廃合を考える会
杉原秀典さん

県立高校統廃合のせめぎ合いは第3ラウンドに入っている。第1ラウンドは、統廃合の対象校名が出ていない段階、2010年度のたたかい。89%の市町議

県議会決議は 計画案の白紙撤回も含む

自民 青木県議

「長浜の未来の教育を拓く検討委員会」が開かれた。どうなるのか心配していたが、大橋副委員長から明確な意義付けをしていただいた。県議会は一年以上議論をせよとの決議を採択し

いま手綱を緩める
わけにはいかない
会長 押谷憲雄さん

「長浜の未来の教育を拓く検討委員会」が開かれた。どうなるのか心配していたが、大橋副委員長から明確な意義付けをしていただいた。県議会は一年以上議論をせよとの決議を採択し

た。会派によって受け止め方が違うが、ここから統廃合に反対してきた。湖北は今日のように雪で閉ざされた感じが、今手綱を緩めるわけにはいかない。長浜市議の一部が、自分たちの意見はこうだという「計画」を出した。今、検討委員会で論議されている中で、矛盾した行動だ。

私たちの決議案に
民主・対話が賛成
県議 青木甚浩さん

ある通りの話をした。「教育長が納得できる答弁をしないと私は湖北へ帰ることが出来ない」と言ったら、教育長は「ヤツと笑っただけだった。こんな教育長でいいのか。」

私たちは自民党が出した決議案に、民主・対話の会は反対すると思っていたが賛成した。決議案は、はじめ私は「白紙撤回」を明確にした内容にしてもらうつもりだったが、そこまで明確には出来なかつた。みなさんに申し訳なかつたが、あの中には、白紙撤回も含まれている。市議の一部が「提言」を出したが、県に持つて

2月5日、大雪の長浜で「第4回湖北の高校を守るつどい」が開催。長浜市民交流センターに90人が集い、熱く語りあいました。冒頭、湖北の高校を守る会の押谷会長が、続いて、来賓の青木県議が挨拶。同県議は先日発表された「プロジェクト21の提言」に触れて、長浜市として「県に持って行くのは長浜の未来を拓く検討委員会」のまとめ、と強調しました。

続いて「県立高校の統廃合を考える会」代表世話人の杉原さんが情勢を報告。「第1と第2ラウンドでは計画を延期させた。いよいよ第3ラウンドに入っている」として、長浜の「教育検討委員会」の役割を詳しく報告。質疑応答の後、リレートーク。最後に、地域・職場で話題にする。3月までに署名を1万人分集める。教育フォーラムに参加する、などの行動を確認してつどいを閉じました。



青木さん

行くのは「長浜の未来を拓く検討委員会」がまとめるものだけだ。次の検討委員会では対月さんが話をしてくれそうです。

多かつた。テストや入試、苦勞の思い出であって嫌な思い出ではない。苦勞した分楽しい。水球部で近畿に行った。3年生の学園祭の劇では脚本と役を担当した。何が一番かと言えば、友達と暮らした日々の生活だ。この北高がつぶされようとして許せない。ぼっか穴が開いたような、穴の正体は、自分の魂の一部だ。自分の人生の軌跡の一部が消える、許容できる部分はない。合理主義、大規模化は解消できない。長浜米原地域をエリアにしており、米原に新設校を作りたいと要望していた。

伊吹の分教室はダメ
米原に新設校を
長浜養護 大石一光さん



大石さん

私は大学生だが、高校の時に着ていた制服を着てきた。北高に誇りを持っている。思い出の証です。3年間、楽しいことばかりでなく苦勞したことが

私に慎重な検討を」との決議案を提出した。本心では反対の与党議員も賛成に回った。そこには、住民の声が強力な風圧となつて働いていた。

第3ラウンド。11月、県は再編案の一部延期を示したが、住民や県議会をなげかりして再編の基本は変えない方針を示した。長浜市は「長浜の未来を拓く教育検討委員会」を設置し地域に開かれた討論を始めた。生徒保護者アンケートや市民フォーラムを行う。

「地域の高校を守る」の一点での合流は、第3ラウンドでも威力を発揮する。ここに確信を

これまで
これからも

地域住民の合流が威力

大阪市の橋下市長はどこまで行くのか、市議員の悉皆調査をした。あなたは特定の政治家を応援する活動(街頭の演説を聴いたりする活動を含む)に参加したか。自分の意志で参加したか、誘われたか。だれに誘われたか。場所と時間は、あなたは組合活動に参加したことがあるか。調査用紙には一枚の文書が付く。この調査は市長の業務命令で全職員に真実を正確に回答していただく。回答がない場合は処分の対象となりうる。真実を報告した場合に懲戒処分の量定を軽減し免職はない。市長は違法、不適切な政治活動と組合活動のウミを出し切ると言う。確かに、大阪市の職員組合は労使一体で違法な選挙活動をしていると指摘される。特定政党の支持など憲法にも組合の道にも外れている。調査の狙いは別にある。勤務時間外の職員は行動を監視、密告の強要。市民も対象だ。調査に依らないと処分すると脅す。職員と市民の行動を監視し、市長のやりたい放題の市役所をつくる。これこそ違法行為だ。橋下氏を持ち上げるマスメディアは口をつぐむ。「ナチスが共産主義者を弾圧した時、自分共産主義者ではなかった。自分共産主義者ではなかった。何の行動も起こさなかった。ナチスは社会主義者を弾圧した。自分は社会主義者ではないので何の抗議もしなかった。それから学生、新聞人、ユダヤ人と、弾圧の輪を広げ、私の不安は増大したが、私は行動に出なかつた。ある日、ナチスは教会を弾圧してきた。私は牧師だった。だから行動に立ち上がったが、すべてがあまりに遅過ぎた。マスメディアも私たちも、マルティン・ルーサーのこのことを思い起こすとき。

統廃合を地域や職場で話題にしていく

困っているのは県の方



教育検討委員会の役割は大きい

長浜住民 辻義則さん

給食がその日の唯一の食事という子も

元長浜北星定 酒井さん



辻さん



酒井さん

進学校を希望している親もいる。私たちの運動も、白紙撤回だけではなく、地域のいろいろな願いに心える学校、学科を考えていく必要がある。「長浜市の未来を拓く教育検討委員会」、委員の役割は大きい。この委員会はビジョンを示す委員会であるべきだと思ふ。

中卒では仕事に就けない。こんな思いで定時制にきた生徒。中にはその日の給食が、その日の唯一の食事という子どももいた。卒業の時には、涙を流して感謝の気持ちを述べていく。そういう子に、遠い能登川まで行くというのですか。

長浜北星の定時制をなくしていいの、という声は、民主党の県議を含めて強い。何らかの形で残す方向の再検討がされる可能性がある。しかし、現状のままなのか、分校、分教室の形にするのか、もっと違う形にするのか、予断を許さない。このままでは、能登川高校は、これまでとは違う総合単位の全く新しい新能登川高校になる。昼夜の定時制がくっついて、全日制と相互乗り入れが出来る。午前から登校しても、午後から登校してもいい。単位を取れるのか、予断を許さない。



對月さん

は卒業出来る学校だ。それ相応の条件整備すれば成功するかもしれないが、今の条件では失敗すると思う。現在、大阪などでは、次々にそのやり方から撤退を始めている。白紙撤回だけで突き進むのか、と言った問題提起があった。この運動は、親、みんなが腹を割って一緒に学校をつくること、統廃合に反対、地域の高校を守るという一点で進めている。いろいろな意見を出しながら、この一点を大事にすべきだ。進学校を望む親の思いも大事にすべきだと思ふ。その点で、湖北では、全県一学区で相当数の子どもたちが彦根以南に流出していることを、何とかしなければならぬという思いがある。湖北の子どもたちが湖北の高校で進学できるようにという点では一致できる。湖北では、全県一学区の見直しも大事にすべきだと思ふ。

事務局長の對月さんは、討論で出された意見にも言及しながら、次の行動提起を行いました。

県は学校から要望があったかのように、県とのやりとりでは、道理のない今回の再編案には白紙撤回で臨む。同時に、内部で今後どういう教育をしていくのか、どういう学校をつくるか、少くとも到達点を大事にして学校づくりに生かしたい。

生徒が主体的に受け止める条件をつくっていく。統廃合の中止を求める署名を3月末までに、1万筆集める。

長浜の検討委員会を傍聴し、3月開催予定の教育フォーラムに参加する。



竹内さん



佐藤さん

長浜で開かれた討論、アンケート、フォーラム

第4回湖北の高校を守る集いで、「高校統廃合を考える会」代表世話人の杉原さんが行った報告を抜粋して掲載します。

県立高校統廃合のせめぎ合いは、最終の第3ラウンドに入っています。

第1ラウンド 県の言い分を聞く

第1ラウンドは、統廃合の対象校名が出ていない段階のたたかいです。2010年度のはじめに県教委は統廃合の方向と根拠を明らかにしました。その根拠が、議会請願と県民討論で崩れていきました。6月11日、甲良町が最初に意見書を採択し、12月には19のまち市町議選(89%)が意見書を採択しました。

長浜市は、9月24日に意見書を採択し、翌日25日に、臨湖に31人が集まり、「湖北の高校を守る会」を結成、湖北のとりくみが始まりました。県教委主催の「県民の意見を聞く会」は、皆さんの参加で、「住民討論」の場になりました。「子どもが減る」「お金がない」「小規模では切磋琢磨できない」との県の言い分は崩れ、地域への思いが強くなりました。今では、「10年間で子どもは減らない」「高校生1人当たりの県費は全国で45位」は、県民の常識です。「誰のた

めの統一再編か」との連載を組む新聞も生まれ、マスメディアの偏りが指摘される中で、統廃合問題は、新聞が住民の信頼を回復する機会になりました。1年先送りが決まりました。

第2ラウンド 地域の台流が県議会を動かす

第2ラウンドは、昨年7月11日、教育委員会の再編計画原案の決定で始まり、「高校を守る会」の3地域への浸透していききました。その声は、今や「湖北では公論」になっています。

8月6日の「第3回湖北の高校を守る集い」で長北の卒業生は、「北高は、生徒が学校を動かすという力がある。僕らは北高に誇りを持っていく。そんな高校をつぶすのか。財政が」と言われても納得は出来ない。僕は、教師になってこの地に居てみたい」と述べ、ついに参加者は信頼と生きる初心を取り戻しました。

行政も地域組織も立ち上がりしました。長浜市長は、「地域の意見を聞かない再編計画は教育基本法違反だ」と厳しく指摘します。9月12日には、長浜市の524自治会を束ねる連合自治会が知事に要請、子どもの数の変化など、問題点を詳しく指摘しました。これは県にとって衝撃的でした。知事は「これがベストの案。対案が

あれば示して下さい」と心しました。こうした動きを受け、9月県議会は統廃合の集中討論の場になりました。8人が討論に立ち、青木議員は「教育長、一旦立ち止まり、湖北の人たちと議論を交わす」という案をいいたくないか、と述べ、私に湖北へ帰れない」と親と地域の声を代弁、議会の最終日は自民党が急遽、「決議案」を提案、そこには「子どもと地域の将来に禍根を残すことは必ず、少なくとも今後1年以上の時間をかけ、更に慎重な検討」とありました。4人が討論、自民党はもちろん決議に賛成です。民主党など野党議員は「決議案に賛成」と切り出し、続いて、「一年以上に期間を先延ばさないように」と言っています。本日は決議反対でも、賛成せざるを得ない。地域住民の声がものすごい風圧になって直接議会を動かしているんです。ここに確信を持つ必要があります。全会一致でした。ある県議は「湖北で再編賛成など言ったら、500票減る」と言います。

第3ラウンド 長浜で開かれた検討が始まる

今、いよいよ、第3ラウンドです。県は11月9日、当初案の統廃合部分を1年先送りし、今年の夏休み前までに計画を策定する方針を示し

ました。地域と県議会の言い分がしるしたものの、長浜市や彦根市の意見を聞く」と言わざるを得ませんでした。長浜では、「未来を拓く教育検討委員会」が設置され、住民に開かれた本格的な議論がはじまり、子どもや保護者へのアンケート、市民フォーラムを実施します。第1回目の会合では、副委員長が「再編の根拠が実に曖昧」とのレポート、子どもの数の変化を分析し、再編計画の発表は行政改革にあると指摘しています。

最後は、地域住民の声で

いま、何が大切か。まず第1は、情勢の厳しい面と明るい面を正確に見ることです。まず厳しい面。更に1年延期と楽観視する傾向もありませんが、県の動きを甘く見ることは禁物です。1年先送りではなく、夏休みまで1、3ヶ月先送りです。基本方針は崩れていません。次に明るい面。振り返ると、2010年度の秋に出来るはずの計画がまだに出来ていないんです。これは、私たちが想像する以上に大きな力です。第3ラウンドでも生きています。ここに確信をもつ事が大切です。いま、困っているのは県の方です。「教育検討委員会」が「長北の廃校を認めない」とした場合、県はこれを無視できる

です。その長浜市はまだ結論を決めていない。最後は、地域住民の声で決まるんだと思います。第2は、「教育検討委員会」を市民の思いを映す場にすることです。第3回検討委員会では、湖北の高校を守る会の對月さんの意見陳述が決まりました。事前事後の宣伝、傍聴を含めて「検討委員会」の状況を市民に知らせ、市民の声を反映することが大事です。これまでに経験したことのない、新しいせめぎ合いです。

第3に、県会議員さんに「地域の高校を守る」立場にしっかりと立つてもらうことです。

第4に、他県に類を見ない滋養のたたくかに確信をもつことです。何が力になっているか。1つ、学校名が出ないうちから立ち上がったことです。これがなかったら、第2・3ラウンドはありませんでした。2つ、「地域の高校を守る会」という一点で、いろいろな立場を超えて地域の人々が合流していることです。保守も革新もありません。そして、教職員と父母・地域の人のつながりが出来てきたことも大事です。この力で、第3ラウンドで勝利して、真に魅力と活力のある学校を、子どもと地域の皆さんと教職員と一緒に築いていきましょう。

伊香高校の教諭佐藤さんがアピールを読み上げ、最後に、市会議員の竹内さんの挨拶で集いを閉じました。

